

杉本徳久 Sugimoto Norihisa <sugimotonorihisa@gmail.com>

2010年10月5日 0:39:04 JST

杉本徳久です。民事提訴の通告メールの件について

(このメールは、杉本氏に提訴予告をした唐沢氏に宛てられたものであるが、山谷少佐、ヴィオロンにも CC で送られた。いざ訴訟となれば、その手続きの内容や進行状況を直接、相手に明かす人間はまずいないであろう。にも関わらず、杉本氏は黙って相手からの連絡を待つことができず、所轄の警察を教えろとか、弁護士の名前を教えろなど、しきりに事件の進捗を問い正そうと、唐沢氏に再三、催促のメールを送り、その内容は次第に過激で恫喝的な調子になって行った。だが、この提訴はヴィオロンが依頼したものでなく、唐沢氏がなぜ提訴に及ばなかったのか、そのいきさつもヴィオロンには知らされていない。唐沢氏は、杉本氏とは別な文脈で、信者を訴訟沙汰に巻き込むことに貢献したのだが、杉本氏はこの頃から、すっかり唐沢氏の掌の上で踊らされていたという印象しか持つことができない。)

拝啓、唐沢治様

「随想 吉祥寺の森から」の杉本徳久です。

さて、先々月、8月6日にあなたから送られてきました「お知らせの件」と題され、「暑中お見舞いを申し上げます。」との文章で始まった私に対する民事提訴の通告メールの件ですが、その後、どうなりましたでしょうか。

こちらはあなたおよびあなたの選任弁護士からの訴状の到着をお待ちしていますが、未だに届きませんし、電話、ファクス、郵便、メールなどでの問い合わせも全くありません。

こちらはあなたの依頼された弁護士名、弁護士事務所の連絡先を連絡するようにと申し上げていますが、それについても何の連絡もありません。

また、あなたが「ニュッサ」＝「雲さん」という男性と揉めている件で、神奈川県警に告訴なさったとのことでしたが、その共犯として私にも刑事責任の追及が広がることのあるとのご指摘もありました。それについても

その後の進展はどうなりましたか。

私のところにはいずれの署からも何の照会、問い合わせもありません。どこの警察署のどの部署の刑事さんの名はだれなのかなど、連絡をお願いしましたが、それについてもあなたは無視を決め込んだままになっています。

救世軍の牧師でもある山谷真さんがあなたの関係者であるとのことでしたが、この件について山谷さんからその後、何の説明もありません。

(山谷少佐はこの件には関係ないので、この件で杉本氏に連絡などできるはずもない。だが、杉本氏は自分の思い込みだけで、「関係者」の範疇を無限に広げて行き、無関係な他人にも、どんどんメールを送り付けたり、中傷を広げて行ったりしてきたのである。

ちなみに、話は逸れるが、この当時、杉本氏が「信頼している」牧師がおり、その牧師が、杉本氏からクリスチャンに対する（迫害）計画をつぶさにメールで打ち明けられており、その牧師は内心、杉本氏を非常に恐れていたため、杉本氏のメールをすべて同氏には黙って唐沢氏に転送していたのだと、唐沢氏からヴィオロンは聞かされた。

唐沢氏は、それゆえ、杉本の手の内はすべて自分に分かっていると述べて、余裕の態度を示していたが、ヴィオロンは、これに不信感を覚え、たとえ杉本氏が相手であっても、このような形での他者の通信の傍受には全く賛同しかねる旨、唐沢氏に伝え、クリスチャンがそんな諜報活動のような活動に手を染めるべきではないと抗議し、その通信内容には全く関知しなかった。

この当時から、唐沢氏に対しては明確な不信感を持ち始めた。なぜ唐沢氏がヴィオロンに断りなく、「ヴィオロンさんのため」であるかのように杉本氏に勝手に提訴を予告し、さらに提訴に関する事実を杉本氏だけでなくヴィオロンに対してもあいまいにし、無駄に杉本氏を怒らせるのかも理解できなかったが、それに加えて、杉本氏のメールを秘密裏に傍受して、計画的に同氏を追い詰めるかのような行動は、さらに不信感を倍増させた。

おそらく唐沢氏は、そのような経緯から、杉本氏が、ヴィオロンのブログに対してプロバイダに削除依頼を出した際にも、その事実を予め知っていたのではないかと見られる。当時、ヴィオロンは多忙ゆえにメールのチェックができず、一週間という回答期限がうっかり過ぎてしまったために、ブログがやむなく削除される事態となったが、後からアクセス記録を見ると、ちょうどブログが削除された時間帯に、唐沢氏がヴィオロンのブログを閲覧していた記録が残っていたのである。そこで、ヴィオロンはこの事実について唐沢氏に問い尋ねたが、むろん、同氏は、削除依頼があった事実を自分が事前に知っているはずがないと否定した。

しかしながら、後に KFC で起こった一連の事件と合わせて、私は唐沢氏の行動はすべてにおいて限りなく疑わしいと感じざるを得なかった。唐沢氏は自分のブログにおいて、自分は「気持

ちイイことしかしない」などとも書いており、クリスチャンとしての倫理・道徳観の欠如は、ブログ内容からも明確に見て取れた。KFCの信徒の中には、はっきりと、「ルークは嘘つきだ」と指摘した者さえもいた。それが言い過ぎでないことは、唐沢氏が、ニュッサのグレゴリウス氏を密室で呪ったり、破滅の宣告を下したことは一度もないとヴィオロン前で再三に渡り、否定していたにも関わらず、後になって、その同氏自身が、Br.Takaこと鶴川貴範・直子夫妻に騙されて、彼らと一緒に、Br.Taka氏の危険性を唐沢氏に忠告したヴィオロンに、三人で呪いと破滅の宣告を下したことによっても明確に裏付けられた。）

あなたが私に連絡をとられてきたそもそものきっかけで、あなたの方、「ヴィオロン」さんについては、以下のように私についてお書きになっています。

<http://makotono.tou3.com/Entry/266/>

内容には全く同意できない上に、とんちんかんで支離滅裂、なんのことやらさっぱりわからず、理解不能です。

(杉本氏は自分に理解したくない不利な事柄であればあるほど、その事実を指摘する相手を馬鹿にし、すべては「とんちんかんで支離滅裂、なんのことやらさっぱりわからず、理解不能」などと、低俗な罵倒語を用いてその内容を頭から否定し、はぐらかすのが常のようである。だが、一体、何が支離滅裂なのか、何ら具体的な指摘はない。杉本氏の主張には常にこうして同氏にとって都合の良い結論だけが一方的に提示され、なぜそのように考えるのか、どうしてその考えが正しいと言えるのか、きちんとした論拠の過程が全くないのである。逆に言うと、論証もできない嘘と言いつつを並べているからこそ、わざと相手を小馬鹿にしたような表現を用いて議論から逃げることしかできないのである。)

ただ、彼女があなた唐沢さんを信頼し、連絡をとっていることはわかりましたので、その後、私に対する提訴の手続きがどうなっているのか、きちんとご説明下さい。

(この文脈も全く不明である。杉本氏に一方的に提訴の予告をしたのは唐沢氏であり、ヴィオロン自身は、そのような依頼を全く行っていない。にも関わらず、杉本氏は唐沢氏だけに連絡を取ろうとはせず、常に可能な限りの他者を、その事件に巻き込んで行こうとするのである。そして、唐沢氏もまた巧妙に同様の方法を使って、一方的な提訴予告によって、関係者を訴訟沙汰に巻き込んで行こうとしたのである。その意味で、今となっては、両者の活動は一見、対立しているように見えても、実際には互いに補完関係にあったのだと言える。)

8月は弁護士などの「夏休み期間」とのことで手続きが止まっているということでしたが、すでに10月に入っております。

以上の件につきまして、早急に説明していただけますよう、強く要望いたします。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

1800001

武蔵野市吉祥寺北町1-5-14

杉本徳久

[sugimotonorihisa@gmail.com](mailto:sugimotonorihisa@gmail.com)

(ちなみに、唐沢氏がニュッサのグレゴリウス氏を密室で呪ったという事実については、真偽のほどは定かではないが、これについても限りなく、唐沢氏は疑わしいとヴィオロンは見ている。むろん、グレゴリウス氏の行状にも様々な問題があったことは確かであり、同氏を唐沢氏の一方的な「被害者」とみなすこともできない。もし本当の「被害者」がいるとすれば、それはグレゴリウス氏と巨大な年齢差があるにも関わらず、不平等な結婚を強いられた若い娘であったものと考えられる。KFCには、ちなみに、唐沢氏が仲人のようになって、他にも家の借金のかたに障害者に嫁がされた若い娘がいたなど、不平等な結婚が起きていたことが、後に信者への聞き取りで判明した。だが、KFCの信徒らは、こうした出来事に反対の声を上げることなく、ルーク氏の判断であれば何ら異議を唱えず黙認し、こうして常に「強い者」の意向に従って、弱者を犠牲にして来たことが、当時を知る信者への聞き取りによって後に分かった。

グレゴリウス氏が、仮にルーク氏から「密室の呪い」を受けたとしても、それについて、杉本氏のブログにコメントを書き込んだことは不適切な行為であった。しかし、唐沢氏が、自らグレゴリウス氏を呪っておきながら、そんな事実はないかのように否定して、グレゴリウス氏を刑事告訴し、ヴィオロンや、他のKFC信者を参考人に呼んで、自分を弁護させようとした事実は、それにまさって大変、悪質で、卑怯なものであった。社会的な高い地位を利用して、唐沢氏は、自分はそのような低俗な行為を行なうはずのない高邁な人間であるという印象を周囲にアピールし、さらには、グレゴリウス氏の窮状を利用して、刑事告訴を自分に有利に運んだのである。

だが、唐沢氏が密室で他人を呪うことが可能な人間であることは、ヴィオロン自身が彼から面と向かって呪いの宣告を受けたことによって明確に分かった。そこで、今日、グレゴリウス氏の事件についても、同様のことが行われた可能性が高いと考えている。

しかしながら、その当時を振り返ると、ヴィオロンも含めて、唐沢氏を取り巻く大勢の人々は、

唐沢氏の二重性ある内心をそこまで見抜くことができず、しかも、唐沢氏が何度もグレゴリウス氏への呼びかけを行っていたことから、唐沢氏は本気でグレゴリウス氏と対決するつもりはなく、むしろ、和解したいと願っているのが本心だと信じており、同時に、グレゴリウス氏に対する同情論も KFC 内外で相当に高まっていた。そのため、グレゴリウス氏がブログで自殺予告をした際などには、関係者から、「これを見捨ててはならない」との心配と非難の声が上がったりもして、ヴィオロンも唐沢氏に「このままでは KFC の歴史に取り返しのつかない汚点を残すことになりかねませんよ」と忠告して、同氏との和解を勧めた。唐沢氏は「どうせ狂言でしょう」と、自殺があり得ないことを見抜いてはいたが、それでも、グレゴリウス氏に自殺しないよう説得するために、ヴィオロンに同行を依頼した（これに対しては、出発直後に、唐沢氏に対して警察から制止が入り、実現することはなかった。それも神の采配であり、良いことであった。もしそのような面会が実現していれば、唐沢氏は自分が直接、グレゴリウス氏と対立しなくて済むように、ヴィオロンを巧妙な盾として使ったであろうことが明白だからである。）。

いずれにしても、当初は、多くの関係者が、グレゴリウス氏と唐沢氏が和解することを願っていたので、その方向で唐沢氏をバックアップしているつもりであったが、実際には、唐沢氏は、平然と自分に有利な嘘をつくことのできる人間であり、グレゴリウス氏と和解するつもりはなく、ただ報復措置として刑事告訴に臨んだだけであった。唐沢氏の人間性については、ヴィオロンは長い間の接触によって、自ら確かめて来たが、同氏は、一見、批判に寛容のように見えても、身内の近い人間からの自分に対する離反や、聖書に照らし合わせた本気の批判や忠告を受け流すことのできない人であった。ヴィオロンは、唐沢氏を兄弟と思えばこそ、様々な忠告を率直に行なって来た。たとえば、同氏がブログ記事で行っていたクリスチャンらしからぬこの世の富の自慢話や、杉本氏への提訴に関するあいまいな態度、唐沢氏がサンダー・シングという異端を見抜けず、この異端思想をブログで広め始めた時や、アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の信徒でありながら、身元を隠して KFC でメッセージをしていた Br.Taka こと鶴川貴範・直子夫妻の危険性について、ヴィオロンは相当に厳しく唐沢氏に忠告を繰り返したが、そういったヴィオロンの「小うるさい忠告」を、唐沢氏は耳障りで鬱陶しく、プライドを傷つけられたとしか感じていなかったようである。唐沢氏には聖書に照らし合わせて何が真実に注意を払うよりも、自分のやりたいように振る舞う自由の方がはるかに大切だったのである。そこで、唐沢氏はヴィオロンが邪魔になり、ついに最後には、ヴィオロンを「神に油注がれた KFC のメッセンジャーである唐沢氏、Br.Taka に逆らう悪魔的信徒」に仕立て上げ、三人で密室での呪いの宣告を下すことによって、すべての忠告に耳を塞ぎ、ヴィオロンを厄介払いした。その当時には、もうすっかり KFC はカルト化していたと言える。そして、ヴィオロンが忠告した通り、唐沢氏はその後間もなく、Br.Taka から裏切られる結果となった。キリスト教界からエクソダスせよと唱えながら、自らキリスト教界と手を結んだのだから、そうになったのは当然である。

ヴィオロンは唐沢氏から受けた「呪いの宣告」の内容が御言葉に照らし合わせて荒唐無稽であることを理解していたので、その内容を信じなかった。そして、この事件について、大勢の信徒らに問うてみたが、誰一人、唐沢氏を擁護する者もなかった。

さて、話を戻せば、唐沢氏が自分の社会的地位を有利に使う週に行なった刑事告訴も、グレゴリウス氏の心身の状態が思わしくないため、この辺で勘弁してやれということで、警察から告訴の取り下げが依頼された。唐沢氏は、グレゴリウス氏に打撃を与えたかも知れないが、同氏を罪に問うことはできなかった。さらに、ただグレゴリウス氏の不適切なコメントを掲載したというだけの行為では、ブログ管理者としての杉本氏の責任を厳しく問うこともできないという判断が下されたように記憶している。その他、「ヴィオロンさんのため」という文脈で唐沢氏が杉本氏に行った提訴がなぜ成り立たなかったのか、その理由もいきさつも、ヴィオロンは知らされていないので、憶測が残るのみである。この提訴予告に関しては何から何までがヴィオロンを蚊帳の外に置いて行われた。ヴィオロン自身も、再三に渡り、態度を明確にするよう唐沢氏に迫ったのである。だが、それに対して返答はなかった。

いずれにせよ、自らの集会に一度でも身を寄せていた信徒を刑事告訴したという事実は、唐沢氏のミニストーリーにも大きな悪影響を及ぼした。この事件は、ヴィオロンにとっても大きな教訓となり、人の魂の墮落の深さと、神以外の目に見える人間は外側がどう美しく見えようとも、すべて例外なく信用ならないことや、真の弁護者は神であるから、人が人を安易に弁護することが危険であることもよく理解させてくれた。だが、それでも、あえて筆者は言いたい。確かに、生きた人間から密室で「破滅と呪いの宣告」を受けることは、心理的には衝撃にならないこともないが、聖書に立脚した信仰を持ってさえいれば、信者は、しょせん人間に過ぎない者から何を言われたところで、同胞に裏切られたという悲しみはあるかも知れないが、彼らの言葉を真に受ける必要はないと分かるので、決して「被害者」にはならないのである。被害者意識というのは、自分の人生の不運を誰かのせいにした、もしくは、誰かにそれを解決してもらいたいという依存心から始まるが、それは結局、悪魔の言い分を拒否できない心の弱さ、臆病さとなり、自分の人生における悪魔の主導権を認めて行くきっかけにしかならないのである。神はすべての呪いを十字架でキリストに負わせることによって、私たちに悪魔の呪いと裁きから永久に解放して下さった。そこで、信者にはいかなる「被害」も生じない。信者は、小羊の血潮によってキリストの義に覆われているので、人から罪に定められたり、呪われたりする理由がなく、神が義とされた以上、信者を呪い、罪に定めることのできる存在はどこにもいないのである。むしろ、そのようなことを企てる者こそ、罪に定められる。福音とは、人を罪に定め、呪うことではなく、むしろ、キリストが十字架で信じる者に与えて下さった義と解放がどれほど確かで、永久に変わらない偉大な事実であるかを全地にあまねく宣べ伝え、この義と解放を受けとる人々を増やすことなのである。信者はこのキリストの義に立脚している限り、自分の人生に対する悪魔の主導権を認める必要もなく、また、認めてはならない。そのことが分かってさえいれば、悪意ある人間の発するつまらない呪いや預言に振り回されて、人生を棒に振る人々は減って行くであろう。どんなに頑張っても、いかがわしい占い師や悪徳メッセンジャーや詐欺師やらを地上から根絶することは誰にもできないが、そのような人々の言葉を聞く側の人間が、御言葉に立脚して自分の心を守り、悪霊に導かれる人々の言い分を、神の事実に立って徹底的に退ける秘訣を知ってさえいれば、悪魔の放った毒矢も信者の心に届く前にへし折られ、その策略は効力を失うのである。)